

薬学部卒業後に農学部を出て社会科学研究者をしています

岩松(菅原) 真紀(30期 1987年卒)

こんにちは。30期薬化卒の岩松真紀です。恩師である松田彰先生が同窓会長になられ、「芳香」とつながりができ、原稿を書くことになりました。社会科学系の研究者になった私の分野の話題も記載してほしいとのことでしたので少々長めです。

1 近況報告

前回「芳香」に執筆させていただいたのはいつだったか記憶が不確かです。卒後病院薬剤師として数カ所で勤務したあと退職し、子どもが中学生のときに、縁あって東京農工大学農学部の大学院を受験しました。合格してしまい、農学部のなかにある文系の研究室のひとつ、環境教育学研究室に所属し、偶然にも北大の教育学部を卒業された朝岡幸彦先生に師事することになります。博士(農学)を得て卒業しての最初の1年は、大学非常勤講師の仕事が半期1コマのみしかなく、他に高校で非常勤講師のお仕事もいただいていた。北大でとった教職の免許を約30年たって使用するとは思っていませんでしたが、持っていてよかったと感謝しました。教えていた生物基礎は、かつての生物Ⅰとは違うものでした。おおざっぱにまとめると、生物の特徴以外に、遺伝子、体内環境と維持、生物多様性と生態系などを扱うものになっていて、薬化学講座をでて、病院薬局で働き、農工大環境教育学研究室をでた身としては、これも偶然に教えやすいものでした。

大学院時代に所属していたのが農学系なので学位こそ農学ですが、「社会教育・生涯学習」と「環境教育」が今の専門で、ありがたいことにいくつかの大学から非常勤のお仕事をいただいています。大学では「生涯学習概論」等の概論系を「教職」「司書」「学芸員」「社会教育主事」等の資格をとる学生に教えることが多いです。とはいえ、まちづくりや公共政策を学ぶ学生たちにも教えてもいます。2010年に大学院に入り2016年に博士課程をでて7年目、スタートがあきらかに遅かった分、常勤の職も望めず科研もとる資格がなく…とはいえあきらめきれず JREC-IN を時折のぞきます。

北大の学部生時代は、アカデミックなことがとんとわからず、学会も私には遠い存在でした。たしか卒業時に、「誰かにいわれたことを覚えるのではなく自分

の好きなことが学べるのが大学だとわかった」、みたいな感想を自分がいっていたようなあいまいな記憶があります。卒論は、いわれたことを実現しようとするだけでいい。自分で研究のデザインができずに終わったのだと、研究者になった今から振り返ってみればわかります。40代になってから全く違う分野の大学院に進み、論文を書けるようになるまでをとっても悩んですごしました。仮説を立て研究を自分でデザインして進めていけるのが(あたりまえですが)研究者であるという点は、理系でも文系でも同じなのだ、書けるようになったときに思い至ったものです。

いまの非常勤先・年間7つは私の過去最大で、オンライン授業が導入されたからこそ成り立つ状況のように思っています。zoom、Google Workspace、Microsoft Teams、そのほか各大学で違う LMS (Learning Management System) に対応できる未来があるとは、大学院にはいった時に ppt すら持っていなかったころからは想像できないことでした。そのほか、社会的な活動としては、日本公民館学会の理事・年報編集委員、日本社会教育学会の編集委員、旬報社からでている『月刊社会教育』の編集委員、東京都公民館連絡協議会の顧問、東村山市の公民館運営審議会委員などのお役目を(2023年7月現在)いただいています。公民館での講師なども引き受けているので、ネット検索でも名前が見つかるかもしれません。

2 研究分野といまの研究関心について

(1)「社会教育・生涯学習」と「環境教育」について

この分野はあまり知られていないようなので、少し説明してみます。くどかったらすみません。「社会教育・生涯学習」や「環境教育」と聞いたときに、みなさんはどのようなものを思い浮かべるのでしょうか。農工大で所属した研究室は、「社会教育・生涯学習」と「環境教育」、少なくとも二足の草鞋は履いていると表現できるようなところでした。ESD(持続可能な開発のための教育、Education for Sustainable Development)、今だとさらに SDGs が、そのふたつをつなぐというか融合させる役割を持っている概念と思っています¹⁾。

政府がさかんに用い、また現場でも使用されるので、リカレント教育やリスキリングという単語を聞くことが増えたと思います。たしかにそれも生涯学習です

が、「社会教育・生涯学習」はそれだけでもない分野です。同窓会のウェブサイトにある文字から関連するものをざっと探すと、「生涯教育特別講座」や、薬化の先輩である吉村祐一さんが昨年講演された「経験からの学び：学生の頃、企業研究者の頃、そして今、私大教員として」の「経験からの学び」、33 期の森厚司さんの「『街の科学者である』ということ」あたりも、（私が研究できるかどうかは別として）この分野の研究対象であるといえるような広い範囲を扱う学問分野にいます。

教育委員会が管轄する「教育」を学校だけにするような自治体でもできましたが、「教育」は学校の外にも存在します。社会教育の施設（機関）例として、図書館、博物館、公民館があるというわかりやすいでしょうか。社会教育法上での「社会教育」は、「学校の教育課程として行われる教育活動を除き、主として青少年及び成人に対して行われる組織的な教育活動（体育及びレクリエーションの活動を含む。）をいう」とされています²⁾。戦後日本の社会教育はこの社会教育法のもとで、学習者の自己教育と相互教育という学習の形を大切にしながら、教育の機会をひろげ、人々の学習する権利を守ってきました。生活課題から学習課題をつくり解決することも特徴のひとつで、自治の主体の形成や地域づくりにも大きな役割を果たしてきたといえます。一方、「生涯学習」については法律上の定義はなく、教育基本法に「生涯学習の理念」として「国民一人一人が、自己の人格を磨き、豊かな人生を送ることができるよう、その生涯にわたって、あらゆる機会に、あらゆる場所において学習することができ、その成果を適切に生かすことのできる社会の実現が図られなければならない」があります³⁾。

次に日本の「環境教育」について考えてみると、子どもを中心とした「学校教育」を舞台の中心として展開されることが多かったのですが、「社会教育」を含めた「生涯学習」として展開する必要性が言われるようになっていきます。

最近の研究動向をさぐるために、ここ 1～2 年の日本社会教育学会のプロジェクト研究のタイトルをあげてみると、「社会教育士養成の可能性と課題」、「障害をめぐる社会教育・生涯学習」、「高齢社会と社会教育」、「SDGs と社会教育・生涯学習」、「多文化・多民族共生社会を目指す社会教育の挑戦」、「社会教育学における余暇・レクリエーションの再検討」となります。プロジェクト研究のうち、学会年報として刊行に結びつくものがあり、『ワークライフバランス時代における社会教育』2021 年、『「学習の自由」と社会教育』

2020 年、『地域づくりと社会教育的価値の創造』2019 年（いずれも東洋館出版社）が、最近刊行されています。社会の変化にあわせて研究課題や研究動向が変わっている様子がみられると思います。

(2)最近の研究関心

そんな広い学問範囲のなかで私の研究関心は、住民の主体的な活動や運動に伴う教育や学習活動、またその学習を支える職員にあります。修士で入学した当初から、社会教育で行われてきた健康に関する教育や学習をテーマとして博士課程まで続けました。その過程で、公害から健康や自然や地域を守る教育や活動を知り、公害があった地域や「公害資料館」とそのネットワークにも興味を持ち研究を続けています⁴⁾。基本的にはフィールドをもつ研究をしていて、こども食堂を訪ねて話をうかがったり、九条俳句不掲載問題のときには集会に参加したり裁判の傍聴にいたりもしていました。老眼となった今では、つらい論文や書籍を読むことも研究の重要な一部です。

九条俳句不掲載問題に関しての詳細を述べてみましょう。2014 年 6 月にさいたま市の公民館の句会で秀句として選ばれた「梅雨空に『九条守れ』の女性デモ」の句が、公民館だよりへの掲載を拒否されたことがはじまりです。それ以前 3 年以上にわたり、無条件でその句会の秀句を掲載していたのに対し、俳句の内容に着目し掲載が拒否されました。1 年にわたる市民団体と教育委員会や市との交渉が進まず、2015 年提訴にいたり、2018 年 12 月に最高裁が原告・被告双方の上告を棄却し、原告勝訴の東京高裁の二審判決が確定、最終的には教育長の謝罪と俳句の掲載に至ったものです。この裁判は、社会教育における「学習の自由」と「大人の学習権」が問われるものでもありました。「大人の学習権」が判決文内でとりあげられたのは、この裁判が初めてのことです。2014 年当時私が執筆中だった D 論の内容に鑑みて、この俳句の不掲載はそれまで考えてきた社会教育の在り方に反するという思いでかかわり始めましたが、研究上の関心をもったのはこの問題（訴訟）にかかわる運動や活動をめぐる学習の過程でもありました。その他問題そのものや訴訟の意義などを含め、先にとりあげた年報『「学習の自由」と社会教育』⁵⁾に詳細があります。

紀要（ジャーナル）に私の論文が掲載されたのが日本社会教育学会なので、そちらが少々厚い記載になってしまいました。日本社会教育学会は 1954 年（昭和 29 年）に設立された歴史ある学会です

(<https://www.jssace.jp/about>)。日本環境教育学会は1990年に任意団体として設立され、現在は一般社団法人となっている学会(<https://www.jsfce.jp/>)です。理系の学会とはニュアンスが違うところもあると思いますが、どちらも(さらには日本公民館学会も)J-STAGEでジャーナルを公開していますので、関心をもってくださった方がいらっしゃったらのぞいてみてください。

(3)コロナ禍で考えたこと

コロナ禍になり、薬学部同窓会のウェブサイトを見るようになりました。何が正しい情報なのか、薬学部卒・病院勤務経験者の私からみた世界と、周りの人との間に違いがあるように感じたからです。SNS等で「明らかにそれをしてはだめ」と私が思う発言をみてしまい、ていねいに説明をしたこともあります(今から思うと余計なおせっかいなのですが)。DNAが本当に4つの塩基でできているかから疑わしい、という投稿を読み、生物基礎を高校で教えていたときの、DNA、ゲノム、遺伝子を納得してもらうまでの難しさを思い出しました。Covid-19をめぐるあれやこれやは、少なくとも生物基礎がベースにないと理解しづらいと感じていますが、選択せずに大学に入ることすらも可能といえば可能なので、それより上の世代にどのように理解されていたのか、逆に情報を発信する側がベースをどこにおいていたのか、が気になっています。

コロナ禍にオンラインで行われた数回の同期会で数人からの最近の研究動向を聞くと、「あ…これはわからない…」という気持ちにもなりました(他の参加者のみなさんは、ほめたたえていました!)。自然と人をつなぐインタープリター(interpreter)という役割の人がいますが⁶⁾、正確な医療情報や考え方や社会をつなぐ役割の人や、教育の機会や場が学校以外の場にも必要なのではないかと、ずっと考えています。北大の科学技術コミュニケーション教育研究部門CoSTEP(Communication in Science & Technology Education & Research Program; コーステップ)もその役割をもつひとつなんだろうとウェブサイト कोरोना禍にながめていました。

私の学位論文の中心は、かつて長野県松川町で行われていた、公民館主事が保健師や栄養士と共同しながら住民の主体的な学習を掘り起こし支援し、長期にわたり組織化していった事例をとりあげた社会教育の分野の研究でした。「健康問題に主体的に取り組もうとする意欲と、その問題解決への力量を身につける学習である」⁷⁾という「健康学習」をテーマ

にしていたのですが、自分たちで調査したり学ぶだけでは不十分になるであろうコロナ禍での「健康学習」を誰がどのように組織し得たのか、前提となる正しい学ぶべきものをどの専門職から得ることが可能だったのか。医療従事者が多忙かつ学習や集会のための施設が閉鎖された特に日本のコロナ禍の初期での検証が必要な気がしています。

先に述べた研究動向ではない社会教育分野のトピックとしては、全国的に自治体の公共施設再編が行われるなかでの社会教育施設の維持、会計年度任用職員制度の登場によりさらに厳しくなった社会教育の専門職の置かれている状況、進む社会教育施設の教育委員会から首長部局への移管等々あげるときりがないのですが、みなさまにおかれましては、学びの世界は学校の外、社会のなかにも豊かにひろがっており、それを支える専門職がいることを覚えていただきますとうれしいです。

参考文献など(以下リンク先の参照はすべて2023年8月2日です)

- 1) 文部科学省「持続可能な開発のための教育」
<https://www.mext.go.jp/unesco/004/1339970.htm>
- 2) 社会教育法 <https://elaws.e-gov.go.jp/document?lawid=324AC0000000207>
- 3) 教育基本法 https://elaws.e-gov.go.jp/document?lawid=418AC0000000120_20150801_0000000000000000&keyword=%E6%95%99%E8%82%B2%E5%9F%BA%E6%9C%AC%E6%B3%95
- 4) 日本環境教育学会でかかわった研究会の成果として、安藤聡彦・林美帆・丹野春香編著『公害スタディーズ 悶え、哀しみ、闘い、語りつぐ』ころから、2021 がでています。
<http://korocolor.com/book/9784907239541.html>
- 5) 日本社会教育学会編『「学習の自由」と社会教育』東洋館出版社、2020
リンク先でまえがきの一部が読めます
<https://www.toyokan.co.jp/products/4299>
- 6) 一般財団法人環境イノベーション情報機構
EIC ネット「インタープリター」
<https://www.eic.or.jp/ecoterm/?act=view&serial=156>
- 7) 松下拓「健康学習」社会教育・生涯学習辞典編集委員会『社会教育・生涯学習辞典』朝倉書店、2012

同窓会 HP:2023年8月24日公開